

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 松永 知恵子 |
| 学位の種類 | 博士 (社会デザイン学) |
| 報告番号 | 甲第494号 |
| 学位授与年月日 | 2018年9月19日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当 |
| 学位論文題目 | セルビア共和国のセルビア系難民・国内避難民への心理社会的支援に関する一考察 ～ローカル NGO ズドラヴォ・ダ・ステの実践と関係性の視点から～ |
| 審査委員 | (主査) 長 有紀枝 (立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授) 中村 陽一 (立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授) 箕口 雅博 (立教大学名誉教授) 柴 宜弘 (東京大学名誉教授・城西国際大学特任教授) |

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

| | |
|--|-----|
| 目次..... | i |
| 図表目次..... | vii |
| 序章..... | 1 |
| 1. 本論文の問題関心と背景..... | 1 |
| 2. 本論文の目的と構成..... | 2 |
| 3. 本論文における用語と付記事項..... | 4 |
| (1) ユーゴ紛争の性質と表記について..... | 4 |
| (2) 心理社会的支援..... | 5 |
| (3) 関係性について..... | 7 |
| (4) ローカル NGO について..... | 8 |
| (5) トラウマの概念について..... | 8 |
| 4. 研究の方法..... | 9 |
| (1) 文献研究、先行研究..... | 10 |
| (2) 聞き取り調査..... | 10 |
| (3) 質問紙調査..... | 10 |
| (4) 事例研究..... | 10 |
| 5. 本論文における事例選択の理由と研究の意義..... | 11 |
| (1) 事例選択の理由..... | 11 |
| (2) 研究の意義..... | 14 |
| 6. 表記について..... | 16 |
| | |
| 【第 I 部】 セルビア系避難民の難民・国内避難民に至る道程 | |
| | |
| 第 1 章 ユーゴ紛争：セルビア系難民・国内避難民が背負う歴史..... | 18 |
| はじめに..... | 18 |
| 第 1 節 ユーゴスラヴィア建国とチトー時代のユーゴ..... | 19 |
| 1-1 ユーゴスラヴィア前史 - バルカン半島の中の「東」と「西」..... | 19 |
| 1-2 ユーゴスラヴィア建国とチトー時代..... | 22 |
| 1-2-1 第一次世界大戦前後..... | 22 |
| 1-2-2 第二次世界大戦におけるセルビア..... | 24 |
| 1-2-3 チトーの治世..... | 26 |

| | |
|--|----|
| 第2節 ユーゴ紛争..... | 28 |
| 2-1 民族主義の台頭..... | 28 |
| 2-2 ユーゴ紛争の経緯..... | 30 |
| 2-2-1 ユーゴ紛争：1991~1995年..... | 30 |
| 2-2-2 ユーゴ紛争：1999年..... | 31 |
| 2-3 ユーゴ紛争とセルビア..... | 33 |
| 2-3-1 国際社会におけるセルビアの孤立..... | 33 |
| 2-3-2 ユーゴ紛争におけるメディアとセルビア..... | 35 |
| 2-3-3 旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所 (ICTY) とセルビア..... | 36 |
| 2-3-4 孤立化によるセルビア人の反応..... | 38 |
| 小括 紛争が残したもの..... | 42 |
| | |
| 第2章 セルビア共和国の難民・国内避難民の避難生活と社会的課題..... | 45 |
| はじめに..... | 45 |
| 第1節 ユーゴ紛争による難民・IDPの集団像..... | 49 |
| 1-1 難民とは何か..... | 49 |
| 1-2 ユーゴ紛争における難民・IDPの構成と移動..... | 51 |
| 1-2-1 ユーゴ紛争における難民・IDPの民族的構成..... | 51 |
| 1-2-2 避難民の発生とその移動..... | 55 |
| 1-3 避難の動線的特殊性（避難先にみる特徴）..... | 57 |
| 1-3-1 旧ユーゴスラヴィア域内の難民・IDPの分布..... | 57 |
| 1-3-2 ユーゴ紛争の難民・IDPにみる避難先の特徴..... | 59 |
| 第2節 セルビア共和国における難民・IDPの庇護..... | 61 |
| 2-1 避難民の受け入れと難民認定..... | 61 |
| 2-2 難民・IDPの収容..... | 64 |
| 第3節 セルビア系難民・IDPの帰還・統合の課題..... | 67 |
| 3-1 難民・IDPの社会経済的状況と帰還・統合の選択..... | 68 |
| 3-1-1 難民・IDPの自立能力についての課題..... | 68 |
| 3-1-2 難民・IDPの収入状況..... | 70 |
| 3-2 セルビア系難民・IDPの帰還とその阻害要因..... | 72 |
| 3-2-1 難民の場合..... | 72 |
| 3-2-2 コソヴォIDPの場合..... | 76 |
| 3-3 統合への課題..... | 79 |
| 3-3-1 難民・IDPを取り巻く社会環境..... | 79 |
| 3-3-2 セルビア系難民・IDPの自立・統合への課題..... | 83 |
| 小括 セルビア系難民・IDPの避難と生活再建..... | 88 |

【第Ⅱ部】 セルビア系難民・国内避難民の心理社会的課題

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 第3章 セルビア系難民・IDPの心理的課題..... | 90 |
| はじめに..... | 90 |
| 第1節 ト라우マ問題の基本..... | 90 |
| 1-1 ト라우マ研究の歴史～ヒステリーから虐待まで..... | 90 |
| 1-2 ト라우マとは何か..... | 93 |
| 1-2-1 DSMにおけるPTSDの見地からのトラウマ..... | 93 |
| 1-2-2 単純性PTSDとは異なる視座からのトラウマ..... | 97 |
| 第2節 ト라우マ性の体験による心理的影響..... | 99 |
| 2-1 ト라우マ性体験が与えるPTSD以外の心理的影響..... | 99 |
| 2-2 ト라우マの記憶について..... | 101 |
| 2-3 喪失体験としての難民・IDP化..... | 103 |
| 第3節 難民・IDPと心理的課題..... | 107 |
| 3-1 紛争に起因する心の傷..... | 107 |
| 3-1-1 難民・IDP化体験のトラウマ性..... | 107 |
| 3-1-2 紛争による心の傷の独自性について..... | 109 |
| 3-2 先行研究の定量的調査・研究にみる紛争の心理的影響..... | 112 |
| 3-2-1 紛争に起因する心理的影響の残存性..... | 112 |
| 3-2-2 ユーゴ紛争による心理的不適応問題..... | 113 |
| 第4節 若年層におけるユーゴ紛争の心理的影響..... | 118 |
| 4-1 児童を取り巻く環境とその心理的影響..... | 118 |
| 4-2 質問紙調査にみえるセルビア系IDP高校生の心理問題..... | 121 |
| 4-2-1 調査の概要..... | 121 |
| 4-2-2 第1次調査の分析結果..... | 123 |
| 4-2-3 第2次調査の結果～第1次調査との比較において..... | 126 |
| 4-2-4 分析結果の考察..... | 127 |
| 小括 紛争と心の傷..... | 131 |
| 第4章 セルビア系難民・IDPの心理社会的実態..... | 133 |
| はじめに..... | 133 |
| 第1節 聞き取り調査にみる成人の難民体験者、IDPの心理社会的実態 1 | |
| ～避難から定住先確保に至る道筋..... | 134 |
| 1-1 聞き取り調査の概要..... | 134 |
| 1-2 紛争発生以前・以後における他民族との関係..... | 135 |

| | | |
|-------|---------------------------------|-----|
| 1-2-1 | 紛争前の他民族との関係..... | 135 |
| 1-2-1 | 紛争後の他民族との関係..... | 138 |
| 1-3 | 難民・IDPになる経緯..... | 139 |
| 1-3-1 | 避難行..... | 139 |
| 1-3-2 | 定住先..... | 144 |
| 1-4 | まとめ～避難から定住先確保に至る道筋～..... | 147 |
| 第2節 | 聞き取り調査にみる成人の難民体験者、IDPの心理社会的実態 2 | |
| | ～難民・IDPになるということ～..... | 149 |
| 2-1 | 定住先での生活..... | 149 |
| 2-1-1 | 落差..... | 149 |
| 2-1-2 | 差別..... | 151 |
| 2-2 | 難民・IDP化がもたらすもの..... | 152 |
| 2-2-1 | 帰属感の彷徨..... | 152 |
| 2-2-2 | 喪失..... | 153 |
| 2-2-3 | 心の傷..... | 155 |
| 2-3 | 再生と支援..... | 157 |
| 2-3-1 | 支え..... | 157 |
| 2-3-2 | 人間の尊厳..... | 159 |
| 2-4 | まとめ～難民・IDPになるということ～..... | 160 |
| 第3節 | 描画にみるIDP児童の心理社会的実態..... | 161 |
| 3-1 | セルビア系コソヴォIDP児童の成育環境..... | 161 |
| 3-2 | IDP児童の描画..... | 162 |
| 小括 | 「普通」の喪失..... | 167 |

【第Ⅲ部】 セルビア系難民・国内避難民への心理社会的支援

| | | |
|-------|---|-----|
| 第5章 | 難民・IDPの回復への心理社会的支援と関係性..... | 169 |
| | はじめに..... | 169 |
| 第1節 | 関係性がもたらすもの..... | 169 |
| 1-1 | トラウマ的体験からの回復と関係性..... | 169 |
| 1-2 | 心理支援方法における「関係性」の潮流..... | 172 |
| 1-2-1 | 社会構成主義が心理支援に与えた「関係性」の影響..... | 172 |
| 1-2-2 | 精神分析分野における「関係性」の潮流..... | 175 |
| 1-3 | 関係性の内的体験－自己対象体験..... | 176 |
| 第2節 | ズドラヴォ・ダ・ステの関係性－相互作用（interactiveness）..... | 179 |
| 2-1 | ズドラヴォ・ダ・ステの成り立ち..... | 179 |

| | | |
|-------|---|-----|
| 2-1-1 | 団体設立の経緯と現在..... | 179 |
| 2-1-2 | 心理ワークショップー相互作用の活動..... | 181 |
| 2-2 | ズドラヴォ・ダ・ステの「関係性」ー心理社会的支援の基本的理念..... | 183 |
| 2-2-1 | ズドラヴォ・ダ・ステの基本的立脚点..... | 183 |
| 2-2-2 | 実践が生み出した関係性ー相互作用..... | 186 |
| 第3節 | ズドラヴォ・ダ・ステーローカル NGO という存在としての関係性..... | 189 |
| 3-1 | 精神風土としての文化とローカル NGO..... | 190 |
| 3-2 | 当事者としてのローカル NGO「ズドラヴォ・ダ・ステ」と関係性..... | 192 |
| 3-2-1 | 当事者同士ー精神風土の共有..... | 192 |
| 3-2-2 | 当事者としての発想ーアイデンティティと誇りの共有..... | 194 |
| 3-2-3 | 当事者としての「影」ー敗北と喪失感の共有..... | 197 |
| 小括 | 再生に向けた関係性とローカル NGO の役割..... | 200 |
| | | |
| 第6章 | ズドラヴォ・ダ・ステの実践ー関係性形成の仕掛けとしての心理ワークショップ..... | 202 |
| | | |
| | はじめに..... | 202 |
| 第1節 | ズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップ..... | 202 |
| 1-1 | 心理ワークショップとその利点..... | 202 |
| 1-2 | ズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップ..... | 205 |
| 1-2-1 | 心理ワークショップと相互作用..... | 205 |
| 1-2-2 | 心理ワークショップと「遊び」..... | 206 |
| 1-3 | ズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップの実際..... | 207 |
| 1-3-1 | 心理ワークショップの基本デザイン..... | 207 |
| 第2節 | ズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップの効果..... | 209 |
| 2-1 | 「名前のワークショップ」にみる心理ワークショップの効果..... | 209 |
| 2-2 | 「名前のワークショップ」の結果についての考察..... | 222 |
| 第3節 | ズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップ活動と IDP 児童の変容..... | 222 |
| 3-1 | 事業の概要と背景..... | 222 |
| 3-1-1 | 事業の概要..... | 222 |
| 3-1-2 | 事業実施の背景..... | 224 |
| 3-2 | 事業の展開と変容のエピソード分析..... | 226 |
| 3-2-1 | 第一段階のエピソード：当事者意識と仲間意識..... | 226 |
| 3-2-2 | 第二段階のエピソード：共同体感覚..... | 228 |
| 3-2-3 | 第三段階のエピソード：ロールモデルからの学習と感謝..... | 229 |
| 3-3 | 事業の成果..... | 230 |
| 3-3-1 | ルールー IDP 児童の共同体感覚..... | 230 |

| | |
|---|-----|
| 3-3-2 「遊び」と「相互作用」としての心理ワークショップ..... | 232 |
| 小括 ズドラヴォ・ダ・ステと関係性..... | 234 |
| 終章..... | 239 |
| 1. 総括..... | 239 |
| (1) 第Ⅰ部..... | 239 |
| (2) 第Ⅱ部..... | 241 |
| (3) 第Ⅲ部..... | 243 |
| 2. 結論..... | 246 |
| (1) セルビア共和国に逃れたセルビア系難民・IDP 化体験の心理的影響..... | 246 |
| (2) 心理社会的支援における関係性の役割とローカル NGO..... | 247 |
| 3. 今後の課題..... | 248 |
| (1) ト라우マの重層性について..... | 248 |
| (2) 心理ワークショップの効果について..... | 248 |
| (3) ローカル NGO の優位性..... | 249 |
| (4) 「影」について..... | 249 |
| (5) 質的研究について..... | 249 |
| 参考文献..... | 250 |

(2) 論文の内容要旨

本論文は、1990年代に発生した一連のユーゴスラヴィア紛争終結後、セルビア共和国に庇護を求め、長い停滞と閉塞された環境に生きるセルビア系難民・国内避難民を事例に、以下2点を目的に執筆された論文である。第一の目的は、難民・国内避難民となる体験が人間の心にもたらす長期的影響をトラウマ体験、喪失体験の見地から検証すること、第2は、難民・国内避難民の心理社会的活性化に取り組む支援活動において、関係性が果たす役割と可能性をローカル NGO の心理社会的支援活動の視点から明らかにすることである。

以上の目的のもとに本論文は、背景や目的、用語の定義等からなる序章、それぞれ2つの章から構成される3つの部、結論を述べた終章の計8つの章から構成される。

第Ⅰ部は、ユーゴ紛争によって避難を余儀なくされセルビア共和国に庇護を求めた旧ユーゴスラヴィア圏のセルビア系避難民が、セルビア共和国で難民・国内避難民となるまでの背景と道程についての考察である。

第1章では、バルカン半島に住み着いた南スラヴ族に歴史の変遷の中で文化的差異が醸

成されていった土壌について述べ、次に第二次世界大戦終結とほぼ時を同じくして建国された旧ユーゴスラヴィアが、東西冷戦時代の終焉と共に勃発したユーゴ紛争により国家解体に至る道筋を論じた。また、ユーゴ紛争では、国際社会に「セルビア悪玉論」が形成されたが、これについてセルビア人がどのような孤立感を抱いたかについて考察がなされた。

第 2 章では、本論文が研究対象とするセルビア系難民・国内避難民が、紛争勃発からセルビア共和国に避難民として庇護を求めて流入してくる過程、および、その後セルビア政府により難民・国内避難民の認定を受け、地元社会で生活の再建に取り組む時点までの事実確認と問題の所在を関係諸機関の資料を基に確認した。また、難民・国内避難民の恒久的解決方法の一つ、帰還と統合の可能性と問題点について考察し、セルビア系難民・国内避難民の生活再構築における社会的課題について論じた。

第 II 部は、第 I 部で論じた歴史的、社会的背景を有するセルビア系難民・国内避難民が直面する心理社会的課題についての分析と考察である。

第 3 章では、心理社会的支援におけるトラウマ問題が浮上する契機となったとされるのがユーゴ紛争であることから、トラウマ研究の変遷を振り返った後に、トラウマ理論の基礎を心的外傷後ストレス障害 (PTSD) を中心に論じた。次に、そのトラウマ概念もまた変遷している点をその影響も含めて議論し、難民・国内避難民化という体験とその心理的影響についての考察を進めた。論を進めるにあたっては、難民・国内避難民化体験が与える心理的影響の特性と長期継続性についての先行研究を整理した。その上で、筆者がセルビア共和国で若年層を対象に実施した質問紙調査の結果を分析、さらにユーゴ紛争が子どもや若年層にどのように体験されたかについての描画分析を行った。

第 4 章では、第 3 章で主に理論と定量的研究からとらえた難民・国内避難民が受けた心理的影響が、実態としてはどのようなものであったか、8名の成人難民体験者と国内避難民への聞き取り調査の記録から分析・考察し、どのような支援が必要であるかについても検討を加えた。同時に、避難後の両親から生まれ難民収容センターで成育するセルビア系コソヴォ国内避難民児童の描画から、紛争が与える心理的影響の痕跡が難民・国内避難民の次世代ともいえるこれら児童にどのように残存しているかについての考察を行なった。

第 III 部は、第 II 部で確認した心理社会的課題への支援方法についての分析と考察である。

第 5 章ではまず、関係性という概念が心理療法にどのように登場してきたかについての潮流を整理、その上で、本論文の研究対象の一つであるセルビア共和国のローカル NGO ズドラヴォ・ダ・ステ (Zdravo da ste) の成り立ちと基本理念、その基本理念において関係性の概念がどのように位置づけられているかについて考察した。次にローカル NGO としてのズドラヴォ・ダ・ステが有する受益者との関係形成における利点、特異性について分析と考察を行なった。

第 6 章では、関係性を主たる理論の一つとして、難民・国内避難民、特にその児童を対象に実施するズドラヴォ・ダ・ステの技法、心理ワークショップについて論じた。まず、ワークショップの基礎理論を概観した後、ズドラヴォ・ダ・ステが提唱する心理ワークシ

ワークショップの特徴を考察し、次にその効果をこれまでの活動実績から検証した。最後に、ズドラヴォ・ダ・ステがセルビア系コソヴォ国内避難民児童を対象に実施した心理社会的支援事業を事例として、関係性を主眼の一つとする心理ワークショップの効用を、事業の展開記録と共に確認し、分析した。この分析においては、心理ワークショップの効果だけではなく、アクターとして存在したズドラヴォ・ダ・ステ自身が、ローカル NGO としての利点をどう活かせたかについても論考を加えた。

終章においては本論文の総括を行い、以下の結論を提示した。

まず、セルビア共和国に逃れたセルビア系難民・IDP 化体験の心理的影響については、文献研究、定量的研究からは、難民・IDP 化が PTSD 症状、抑うつ等の心理的影響を長期的に残すことが検証された。しかしセルビア共和国のように、紛争終結から長い年月を経ても復興が十分に達成されない停滞した社会においては、紛争の心理的影響は病理的というより、慢性的な停滞感、閉塞感となって表れている。さらにそれは、難民・IDP 集団以外にもおよぶ傾向があり、支援の立場からは、属性だけでリスク集団を同定できないことが確認された。聞き取り調査からは、難民・IDP 化によって生じた心理的影響が明らかに可視化される時期は経過したが、心の根底にはまだ潜在しており、セルビア社会の経済的停滞も相俟って、むしろ次世代、次々世代の若年層と子ども達の心理社会的課題が憂慮される結果となった。

次に心理社会的支援における関係性の役割とローカル NGO については、研究対象としたズドラヴォ・ダ・ステの心理ワークショップが、分析結果から有効性のある取り組みであることが実証された。また、家族が父祖伝来の土地に象徴されるルーツとの分断（家族に布置された根こぎ感）と、難民収容センターというセルビア社会から孤立した場所で生育することによる分断という、二重の分断にさらされている IDP 児童については、遊びが重要な構成要素になっている心理ワークショップは、その場での体験とその積み重ねが内在化されるため特に児童には効果的であると結論付けた。難民・IDP 化の根底にある「分断」された過去と「再建」という現実と未来の命題に対し、支援の場に社会というメタファーを持ち込み、関係性の役割を主眼とした心理ワークショップという支援方法には適合性があると判断した。

さらにローカル NGO については、受益者に安心感と親密感を与える精神風土としての文化を共有できる点に最大の利点があるとした。心理社会的支援には、ローカル NGO の役割をより活性化することが有効であると同時に、そのローカル NGO が有している当事者性故の「影」の側面については、より深い考察が必要であるとも指摘した。心理社会的支援を行う他地域、特に国外の援助団体は、ローカル NGO との協働を必要とする。「影」への理解は、その協働の質の向上に有益な視座を与えるものと主張した。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の最大の特徴は、本論文が心理学、社会学、歴史学、国際政治学という領域を横断して書かれた学際的研究であること、また申請者が研究対象である旧ユーゴスラヴィア諸地域と 4 半世紀におよぶ関係を築き、実践と論考を重ねた継続的な研究の成果であることが挙げられる。この2点は後述することとし、その他本論文を特徴づける5つの点を指摘する。

まず1点目は、セルビア系難民・国内避難民の心理社会的課題を対象としたことである。申請者が本論文で明らかにしたとおり、心理社会療法はまさにユーゴスラヴィア紛争の犠牲者の支援活動を通じて発展を遂げたといっても過言ではない。実際の被害に加え、「セルビア悪玉論」に代表される国際政治の力学から、心理社会療法はセルビア系武装勢力を加害者とする、ボスニア・ヘルツェゴビナとクロアチアの性暴力の被害者への支援の形で発展した。しかし、紛争に起因して避難を余儀なくされた住民の重い心理社会的課題、個々の難民・国内避難民の心理的負荷は、民族的帰属を超え、先行研究が極端に少ないセルビア系の難民・避難民にも同様にみられる。民族的には「敗者」となり、「加害者」となったセルビア人もまた、故郷を追われ、生活基盤を喪失し、生活再建の苦難を負っている。こうしたセルビア系難民を対象にした本論文は、ボスニアやクロアチアに偏りがちであった従来の研究のギャップを埋める重要な論考と位置付けることができる。

2点目は、難民・国内避難民化によって生じる心理的負荷とその継続性に加え、それを取り巻く社会の動き・経緯の双方を論じることで、内的体験と外的体験の繋がりの解明を試み、人間の内面と社会的文脈の繋がりの連続性を明らかにした点である。

3点目は、難民・国内避難民化等の紛争体験による心理的衝撃の経時的变化を追った点である。ユーゴ紛争を事例としたトラウマ等の紛争に拠る心理的影響に関する研究は、ユーゴ紛争中、ないしは紛争終結後間もない期間に集中して行われた。これに対し、本研究は国際社会の関心を集めなくなっただけでなく、なお続く難民・国内避難民生活、それらを経た集団において残される心理的影響の痕跡と、次世代への影響を対象とする研究をセルビア共和国で暮らすセルビア系難民・国内避難民を事例として行った点が特筆に値する。

4点目は、そのような集団への心理社会的支援を、関係性を軸に論じた点である。個別の技法に焦点を当て、その効果を論じるのではなく、人間の存在に不可欠な他の存在との関係性の形成、あるいはその関係性への介入が支援として有効であることの立証を試み、その関係性形成の仕掛けの一つと考えられる心理ワークショップの有効性を明らかにした点である。

5点目としては、心理社会的支援のアクターとしてローカル NGO の役割を論じた点があげられる。本論文では心理社会的支援における援助者と受益者が文化を共有することによって得られる優位性について考察し、更にはセルビア人として同じ紛争を経た当事者とし

でのローカル NGO に存在する「影」ともいえる当事者性を論じた点も本論文の意義であり大きな特徴である。

(2) 論文の評価

本論文は、申請者が、1993 年以来四半世紀にわたり、立場や所属の異動はありつつも、一貫して関わり続けてきた旧ユーゴスラヴィア地域において、公開された資料や報告書、研究書の渉猟は言うに及ばず、独自に収集した資料、自ら多年にわたり継続的に行ったインタビュー調査、児童の描画などの分析に基づき、時に当事者として支援活動にかかわりつつも、一定の距離と客観性を担保しつつ論考を重ねた成果である。審査委員会では、先行研究の少ないセルビア共和国に庇護を求めたセルビア系難民・国内避難民の心理的課題に対し、こうした研究手法をもってまとめた本論文は、他に類を見ない研究であるとの高い評価を受けた。さらに本論文の主題を考察するにあたり、申請者は特定の分野、たとえば心理学のみに偏ることなく、社会学、歴史学、国際政治学といった学際的な視点から検討を試みた点も同様に評価された。

他方で、歴史的視点からみたユーゴ紛争の評価については、歴史とともに分断が刻まれ、民族紛争は避けがたい帰結として議論された点について、3 民族が共存した時代も一方に長く存在することから、今後の復興や多民族の共生を考える際に、分断のみに着目する認識の修正の必要性も指摘された。

申請者が今後の課題として挙げたトラウマの重層性、心理社会療法の有用性の評価、ローカル NGO の優位性、ローカル NGO ズドラヴォ・ダ・ステの「影」についての議論は、いずれも重要な視点であり、といわけ申請者の独自性が顕著に表れた「影」の議論は申請者が今後、研究者として本研究をさらに発展させていく契機になるものと高い期待が寄せられた。